

郷貝塚発掘調査報告書

1986

財團法人広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター発表報告書第45集
埋蔵文化財調査報告書正誤表

頁・行	誤	正
2・19	上更土質層	上更地質層
2・25	中世紀	中世
13・26	鐵鑄	鐵造
14・第9回	(土壤説明)	1. 砂褐色混じ砂質土 2. 黄褐色砂質土 3. 地山(黄褐色砂質土)
15・3	第9回88	第10回88
22・12	口徑19.1cm	口徑19.1cm
22・15	被燒	被燒
22・21	輪面はば平直	輪面はば平直
27・3	高さ30cm	高さ3.0cm
28・4	17世紀油華は残	17世紀油華
29・16	…多種多様である。また。	…多種多様である。また。

郷貝塚発掘調査報告書

1986

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

- 1 本書は、昭和60年1～3月に発掘調査を実施した広島岩国道路建設工事に係る郷貝塚（広島県佐伯郡大野町所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団広島建設局から委託を受けて、財團法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 本遺跡から出土した陶磁器のうち、備前系陶器を除くほとんどすべてについて、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の御教示を得た。
- 4 造構の実測・写真撮影は、梅本健治・加藤謙・唐口勉三及び調査補助員の藤田広幸が行い、遺物の実測・写真撮影・製図は、梅本・道上康仁・辻満久が、本書の執筆・編集は梅本が行った。
- 5 本書に使用した造構の表示は、SK：集石造構・炉跡・性格不明の土坑、SX：性格不明のピット群である。
- 6 図版と挿図の遺物番号は同一である。
- 7 本書に用いた方位はすべて磁北である。
- 8 第1図は、建設省国土地理院発行の1:50,000の地形図（巣島）を使用した。



大野町位置図 ドットは郷貝塚を示す

目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	4
IV. 遺構と遺物	6
V. まとめ	28

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)	3
第2図	周辺地形図 (1 : 2,000)	4
第3図	造構配置図 (1 : 400)	折込
第4図	土層断面図 (1 : 100)	5
第5図	第1貝層出土遺物実測図(1) (1 : 3)	7
第6図	第1貝層出土遺物実測図(2) (1 : 3)	9
第7図	第2・3貝層出土遺物実測図 (1 : 3)	11
第8図	SK 1 実測図 (1 : 40)	折込
第9図	SK 2 実測図 (1 : 40)	14
第10図	SK 1・2出土遺物実測図 (1 : 3)	14
第11図	SX 1 実測図 (1 : 40)	15
第12図	SX 2 実測図 (1 : 40)	15
第13図	SK 3～SK13実測図 (1 : 60)	16
第14図	調査区出土遺物実測図(1) (1 : 3)	19
第15図	調査区出土遺物実測図(2) (1 : 3)	20
第16図	調査区出土遺物実測図(3) (1 : 3)	21
第17図	調査区出土遺物実測図(4) (1 : 3)	23
第18図	調査区出土遺物実測図(5) (1 : 3)	24
第19図	調査区出土遺物実測図(6) (1 : 4)	25
第20図	調査区出土遺物実測図(7) (1 : 2)	26

図 版 目 次

図版 1 a	貝層検出状況 (西から)	図版 5	出土遺物(2)
b	同 上 (南から)	図版 6	出土遺物(3)
図版 2 a	第1貝層東西断面 (南から)	図版 7	出土遺物(4)
b	貝層堆積状況	図版 8	出土遺物(5)
図版 3	土塙及び遺物出土状況	図版 9	出土遺物(6)
図版 4	出土遺物(1)	図版10	出土遺物(7)

I. はじめに

本発掘調査は、広島岩国道路（広島県佐伯郡廿日市町宮内～山口県岩国市室ノ木町）建設工事に係るものである。広島湾西岸は近年臨海工業地帯、近郊住宅地などとしてめざましい発展を遂げ、同地域の主要道路である一般国道2号線広島岩国間の交通量は増加の一途をたどり、飽和状態に至っている。したがって本道路は、一般国道の広島岩国間のバイパスとして現在の道路交通混雑緩和に対処するとともに、瀬戸内海沿岸地域の産業経済の発展に寄与するものとして建設されることになった。

昭和48（1973）年1月、日本道路公団（以下「公団」という。）から広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に対して、広島岩国道路建設予定地内における埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会があった。県教委ではこれをうけて現地踏査を行い、予定地内に郷貝塚及び高見遺跡（弥生時代）・大野中学校裏貝塚（中・近世）の3遺跡が存在する旨、公団に回答した。その後、昭和53（1978）年には高見遺跡の発掘調査を、昭和56（1981）年には大野中学校裏貝塚の試掘調査を実施したが、両遺跡とも道路建設予定地は遺跡の縁辺部で、遺構は存在しないことを確認した。郷貝塚については、昭和57（1982）年9月に試掘調査を実施して、貝層・集石遺構などを検出し、中・近世を中心とする貝塚であることを確認した。郷貝塚の取り扱いについて、その後県教委は公団と協議を重ねたが、現状保存は困難であるとの結論に達し、事前の発掘調査が必要である旨を公団に通知した。昭和59年（1984）4月、公団は財團法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に発掘調査を依頼した。昭和59（1984）年12月センターは公団との間に委託契約を締結し、昭和60（1985）年1月7日～3月9日の約2か月間発掘調査を実施した。本報告書は、この発掘調査の結果をまとめたものである。当地域研究の新たな資料として活用されれば幸いである。

なお、調査にあたっては広島県教育委員会の御指導を得るとともに、大野町教育委員会、日本道路公団広島岩国道路工事事務所及び地元の方々には多大なご協力を得た。記して謝意を表します。

II. 位置と環境

貝塚が所在する佐伯郡大野町は広島市の西南方20kmに位置し、大野瀬戸を挟んで巣島（宮島）と対峙する。町域の8割が500~600m級の山塊から成り、山が海に迫る地形のため、平野部は極めて少ない。近世以降の埋め立てによる毛保川・永慶寺川河口付近の平野、東北一西南方向の断層谷の中央を流れる永慶寺川流域の狭隘な谷底平野がほとんど唯一のものである。特に後者は、廿日市町平良に比定される古代山陽道の「種籠駅」から内陸部の中山～高見～別府～「勝瀬駅」（大野町高畑に比定）～「遠管駅」（大竹市小方に比定）と、主に瀬戸内海沿岸を通る古代山陽道・近世西国街道が通過する往古の陸路の要衝であった。

そこで、大野町周辺では遺跡の発掘調査例は皆無に近く、特に古代以前の様子については明確にし難い。僅かに、縄文土器を出土した高畑貝塚、弥生土器を出土した高見遺跡、縄文時代後期・弥生時代中期の土器や石器を出土した宮島町のたたら窯遺跡などが知られる。

中世の大野町は巣島神社領として登場する。中世末期の戦国時代には、大内氏の安芸国進出の拠点としての門山城跡、勝山城跡、毛利氏と陶氏の抗争の舞台となった宮島町の宮尾城跡などがある。廿日市町の阿品積石塚は、中世を中心とした時期のもので、南北7.5m、東西6.5mの規模をもつ。地山を径8.0m、高さ1.5mの円形に整形したのち、墳頂部に一辺5.0mの方形に石積みを行い、さらに北西へ2.0m拡張して石を葺いたもので、埋葬主体は検出されていない。巣島神社社殿と大鳥居の間に位置する宮島町の玉御池では、13世紀後半～15世紀後半、16世紀代の土師質土器（碗・杯・土鍋・捏鉢）、備前焼（壺）、亀山焼系の土器片、中国製の青磁などが出土している。同じく、宮島町の経尾経塚からは12世紀代の青白磁合子、和鏡などが出土している。また、大野町では上更土貝塚、大野中学校裏貝塚などの中・近世に属するとされる貝塚が存在するが、その内容は詳らかでない。

なお、本遺跡については昭和47年（1972）年11月、山陽新幹線建設工事に先立って南側の一部を発掘調査している。その際、東西約6m、南北約4mの集石造構1と長さ約20m、幅約1.6m、深さ0.6mの溝状造構1が検出された。これらの造構は遺跡の中心部からかなり離れており、貝塚形成時に直接つながりはないが、調査地が中津岡川の氾濫原上にあたり本遺跡周辺における中世の土地利用を知る上で貴重な資料を提供している。

（註）

(1) 今田三哲「廿日市周辺の先史・古代遺跡の概観」「廿日市の文化」第1集 昭和37(1962)年。

(2) 広島県教育委員会「広島県佐伯郡廿日市町阿品積石塚発掘調査報告」昭和50(1975)年。

- (3) 是光吉基「宮島町玉御池出土の中世土器」「宮島の歴史と民俗」No.2 昭和58(1983)年。
- (4) 広島県教育委員会「上更地貝塚」「山陽新幹線建設地内道路発掘調査報告」昭和48(1973)年。
- (5) 同 上。(4)



第1図 周辺道路分布図 (1 : 50,000)

1. 鄭貝塚
2. 門山城跡
3. 大野中学校裏貝塚
4. 高畠貝塚
5. 河内城跡
6. 高見道路
7. 上更地貝塚
8. 阿品積石塚
9. 綾尾絆塚(清盛塚)
10. 勝山城跡
11. 宮尾城跡
12. 玉御池
13. たら海道路

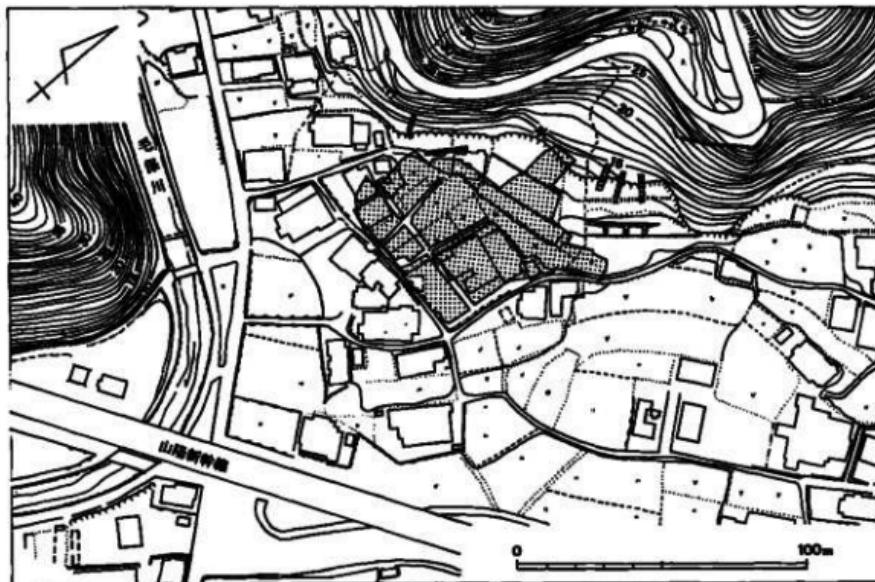
III. 調査の概要

舞貝塚は、佐伯郡大野町字滝山⁵⁹⁷²、⁵⁹⁷³滝之下に所在する近世貝塚である。

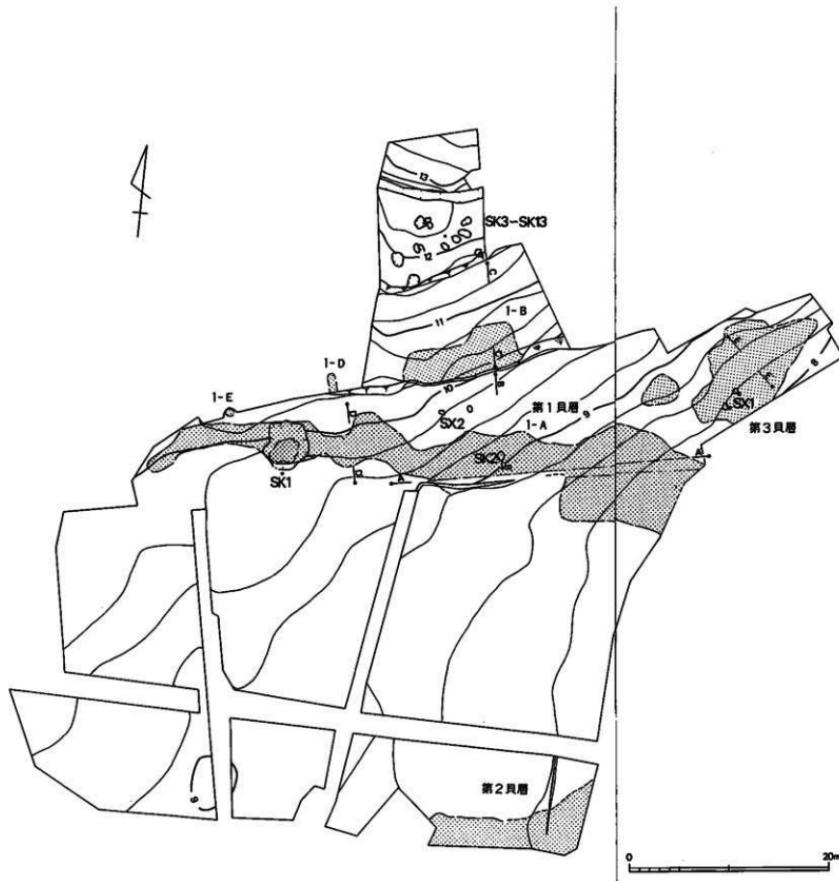
本貝塚は、大野瀬戸を介して嚴島と対峙する位置にあり、造跡の北と西に山塊が迫る標高10m前後の山麓に位置する。東北一西南方向に走る断層谷を流れる永慶寺川流域の平野部の西端、山間を繞うようにして流下してきた毛保川が平野部に出るあたりの左岸に位置する。造跡の現状はほぼ段状の畠地及び宅地であるが、貝層下にうすく堆積する黒褐色砂質土層直下は黄褐色砂質土の地山であり、特に調査区西南端では厚く砂が堆積することから、貝層形成当初は海浜にきわめて近い位置にあったのではないかと考えられる。

舞貝塚で検出した造構は、アサリを主体とする貝層3箇所、土塁13基、ピット群2である。貝層・集石土塙などから、唐津焼・伊万里焼・備前焼を中心とした陶磁器（碗・皿・擂鉢・鉢・瓶・碗蓋・猪口・甕・徳利・仏瓶器など）、土師質土器・瓦質土器（小皿・鍋・羽釜など）、石製品（石臼・硯など）、鐵器、古錢（寛永通宝）、骨角器、土人形及び櫛文土器などが出土している。

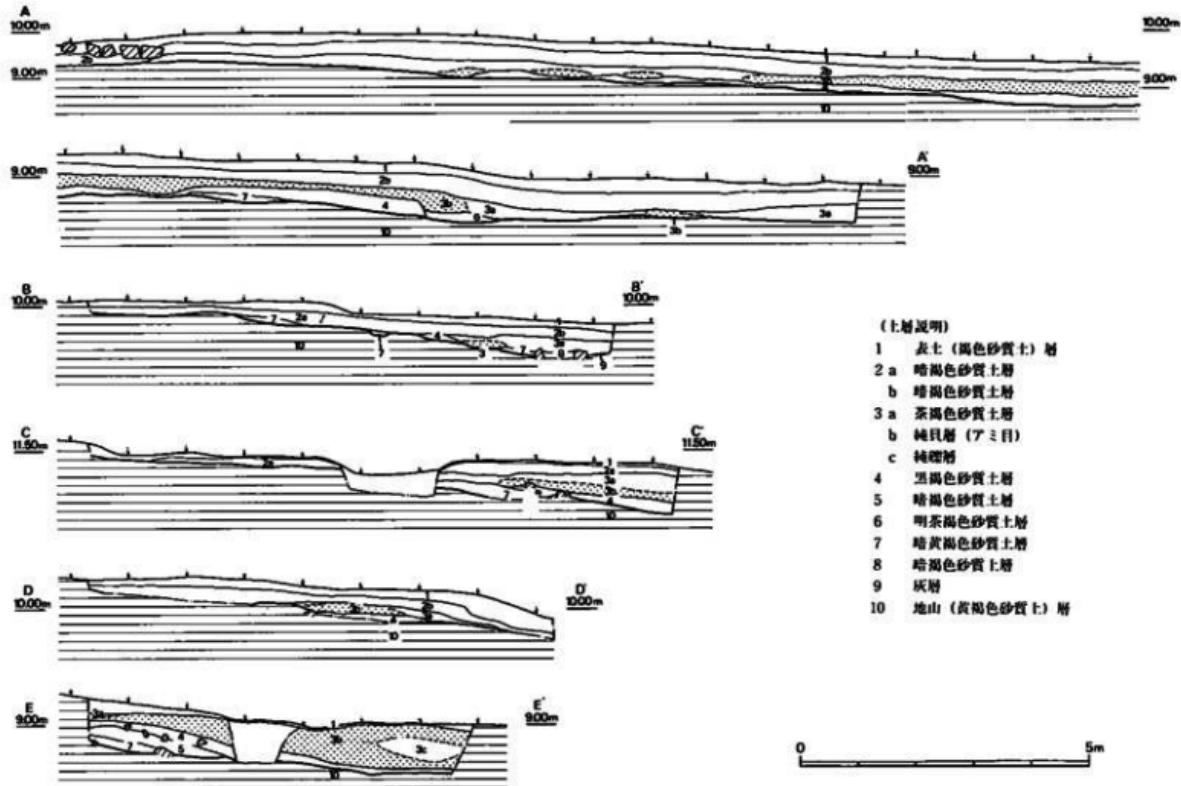
なお、調査区域外北方で人骨1体分が工事中に出土した。



第2図 周辺地形図 (1:2,000) アミヨは調査区、★印は人骨出土地



第3図 造構配置図 (1:400) アミ目は貝層を示す。



第4図 土層断面図 (1 : 100)

IV. 遺構と遺物

1. 貝層（第3・4図、図版1a・1b・2a・2b）

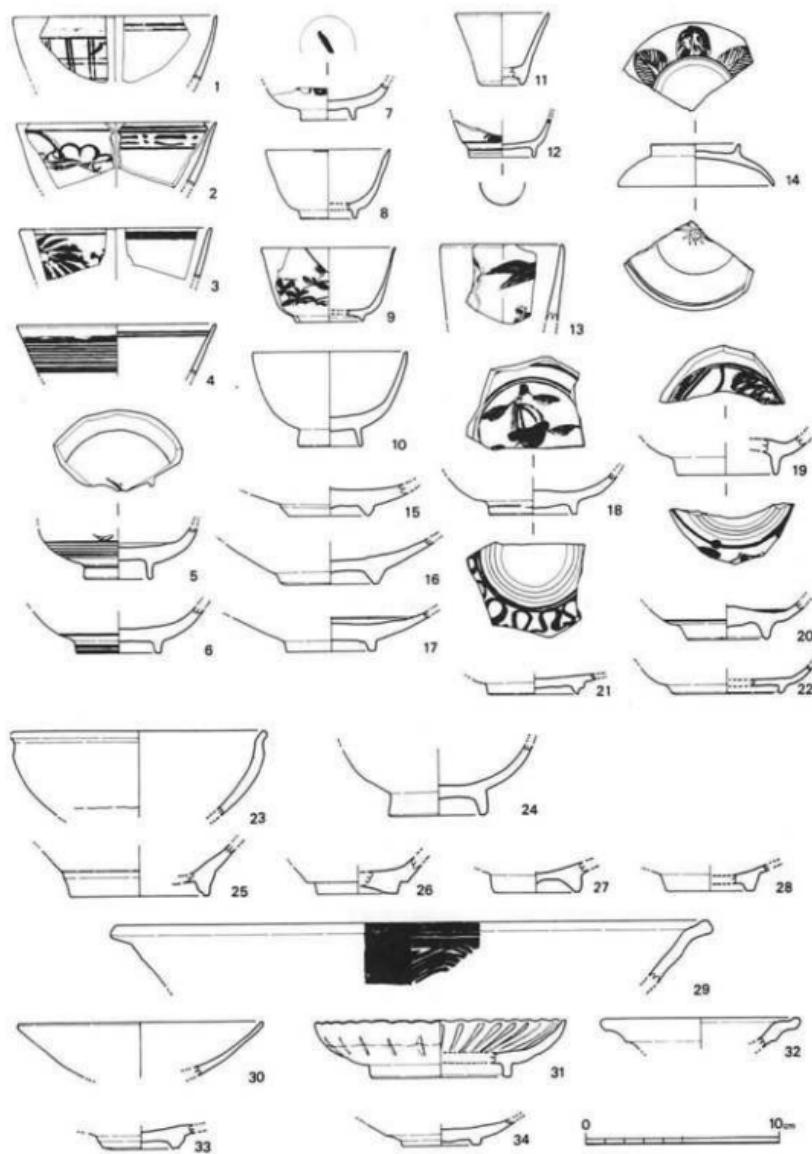
(1) 第1貝層

第1貝層は遺跡の中心をなすもので、現状は調査区のほぼ中央に東西方向に長く帯状に堆積している（1-A）。1-Aの北側はゆるやかな斜面を段状に削平して畠地としており、現状では散在的な状況を示す小貝層（1-B～1-E）も本来は1-Aとともに一つの貝層を形成していたと考えられる。第1貝層の全体規模は東西約56m×南北約20～24mである。東側は調査区域外に貝層がのびており、南北両側は宅地あるいは畠地により全面的な削平をうけているため、原状の規模はさらに大きくなるものと思われる。貝層の厚さはおよそ10～40cm（純貝層の厚さは10～20cm程度）である。

貝層は、表土（褐色砂質土）層、暗褐色砂質土層（2a・2b層）の直下にあり、地表面から貝層上面までの深さは約20～50cmである。貝層は大きく上下2層に分かれ、貝殻片間にしまりのない茶褐色土を含んだ混貝土層（3a層）と、貝殻片がぎっしりと詰まった純貝層（3b層）から成る。なお、貝殻はほとんど破碎をうけているが、下層では破碎をうけていない部分がある。第1貝層全体に3a・3b層が存在するのではなく、3b層である純貝層は途切れることが多い。また3a層である混貝土層は、おそらく畠地として後世の削平をうけていると考えられ、直上の2a・2b層に多量の貝殻片・遺物が混入している。貝層直下にはうすく黒褐色砂質土層が堆積し、その下位に地山（黄褐色砂質土層）がある。

貝層を構成する貝殻の種類はアサリがほとんどを占め、下端付近でごくわずかにハマグリ・マガキ・巻貝などがみられる。貝層の中からは獸骨多数とともに、唐津焼・伊万里焼などの肥前陶磁器を中心とした陶器・磁器・土師質土器・瓦質土器などが出土している。

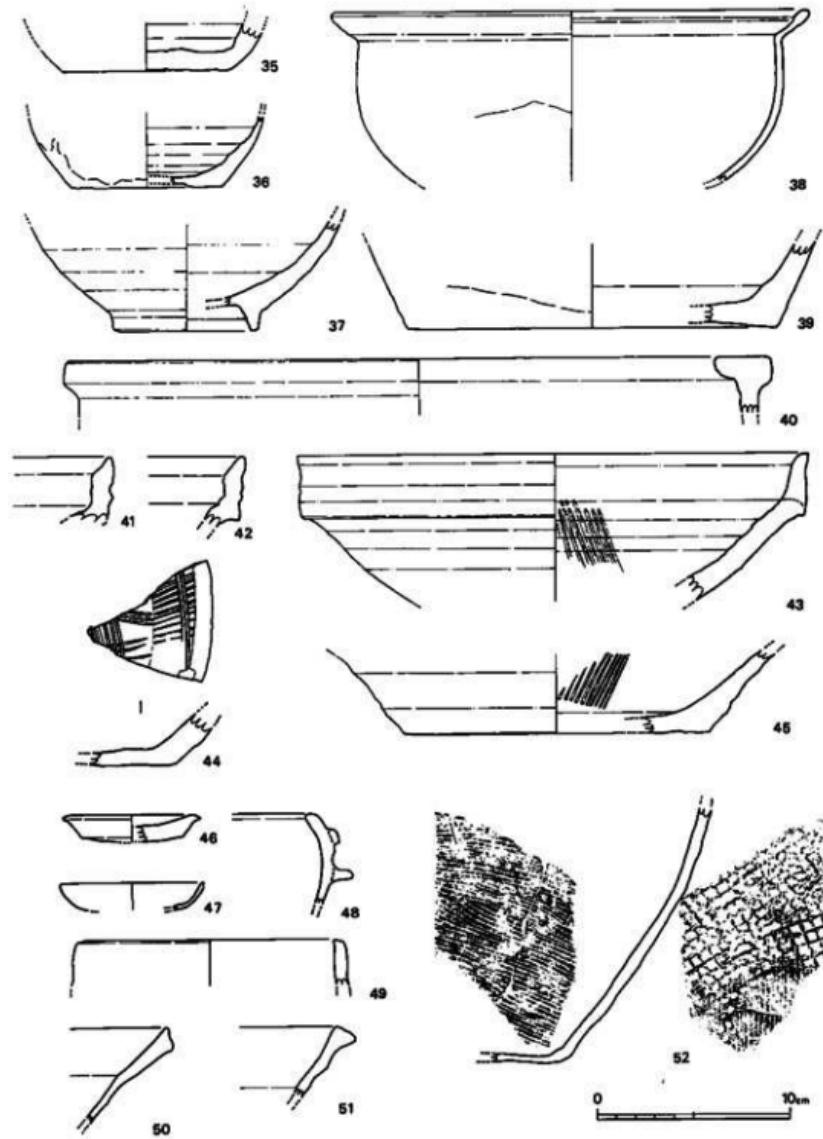
出土遺物 磁器（第5図1～22）は、伊万里焼（9・12・16・17）、伊万里焼系（2・5）、その他（1・3・4・6～8・10・11・13～15）、および中国（明）製のもの（18～22）とがある。器種としては、碗（1～10・13）、皿（15～17）、碗蓋（14）、などがある。1～4は外面に文様、口縁内面に2条の圓線を中心とした染付を行う。5・6は胴部下半～高台外面に圓線を中心とした染付を行い、また5は見込み周縁に1条の圓線を、見込み中央には文字様の文様が見られる。いずれも高台疊付露胎で、6は見込みは蛇ノ目釉ハギである。7は見込み中央と胴部下半に染付を行い、高台疊付露胎である。8は、口縁外面・胴部外面下端に各1条の圓線を施す。9は胴部外面に草花文を描く。10は高台疊付露胎の白磁碗、11は高台疊付露胎の白磁の猪口である。12は、胴部下端に施文し、胴部下端・高台外面・



第5図 第1貝層出土遺物実測図(1) (1:3)

高台内に計4条の圈線を描く。13は胴部外面に金・朱・暗灰緑色の色絵を描く、筒形の碗である。14は体部外面と見込み中央に施文し、口縁内面及び見込み周縁に圈線を描く。高台疊付は露胎である。15・17は見込み蛇ノ目釉ハギ、16は見込み・高台疊付に砂目跡がみられる。17の見込み周縁には2条の圈線をみられる。18～20は底面中央が部厚く、見込み周縁が凹む形態の碗で、高台はほぼ直立している。高台疊付は露胎である。18は見込み周縁に2条の、また胴部下半に1条の圈線を描き、見込みに草花文を描く。胴部外面にも施文がみられる。施釉部分は全体に貫入が顯著である。19は見込み周縁及び外面胴部下端に各1条の圈線を描き、その内側・上方に施文する。20は胴部外面下端と見込み周縁に各1条の圈線を描く。21・22は白磁皿で、薄手のつくりである。21は内面施釉、外面無釉で、22は高台疊付露胎である。

陶器（第5図・第6図23～45）は、唐津焼（34）、唐津焼系（27～29・33・37）、瀬戸・美濃焼系（23・26・31・32）、備前焼系（41～45）、その他（24・25・30・35・36・38～40）に分かれる。器種は、碗（23・24・26）、皿（30～32・34）、擂鉢（41～45）などがある。23・26は天目茶碗で、23は内外全面に黒釉を施し、口径13.3cmである。26は、外底面中央にむかってゆるやかに凹む削り出し高台である。内面褐釉を施し、外面は無釉である。24は黄白色を呈する京焼風のもので、貫入が顯著である。高台疊付無釉、25は内面無釉で外面全体に白化粧土を塗付したのちに透明釉を施している。27は高台疊付露胎で、見込み・高台疊付に砂目跡が認められる。29は白化粧土で波状文を描いた「刷毛目」手法のもので、皿あるいは鉢と思われる。30は底部から外上方に直線的にのび、端部を丸くおさめる口縁部をもつ薄手の皿で、口径12.4cmである。31は菊皿で、口径12.7cmである。素地は黄白色で、内面全体と外面体部上半に淡緑色の釉を施している。32は屈曲して水平にのびた口縁の端部を上方に肥厚させた折縁皿である。34は内面施釉、外面無釉で、見込み・高台疊付に砂目跡を残す。35～37・39は底部片である。35は内面ロクロナデ、外面粗い横ナデ、外底面は粗い板ナデを施す。無釉で、色調は茶褐色である。36は外面施釉で、内面ロクロナデ、外底面は中央に浅く段が付く。胎土淡灰色～黄白色で、内外面は鉄漿を塗っているのか色調は茶褐色である。37は高台付の鉢と考えられる。無釉で、内面全体と体部外面上半ロクロナデ。体部外面下半以下がケズリで、削り出し高台である。色調は淡褐色～濃茶褐色である。39は内外面ともロクロナデで、胎土の色調は淡暗赤褐色、器表の色調は内外面とも濃茶褐色である。38は薄手のつくりの鉢あるいは鍋状とみられるもので、胴部外面上半～内面施釉、胴部外面下半に煤が顯著に付着している。40は口径30.6cmの大型壺の口縁部片と考えられる。口縁部上端面は無釉である。41～45は擂鉢である。41・42は、直立



第6圖 第1具層出土造物實測圖(2) (1 : 3)

する口縁の端面をつよく内傾させて尖り気味にしたもので、外面に2条の凹線をめぐらす。43はほぼ直線的に外上方にのびる体部から直立する口縁をもつ。口縁端面は内傾気味で端部は尖り気味におさめる。口縁外面には2条の浅い凹線を施す。内外面ともロクロナデで、体部内面に8条程度を一単位とする浅く幅広の櫛描条線を施す。櫛描条線の単位間は間隔をおいている。41・42に比べると口縁外面の凹線が浅いため全体にメリハリがない。口縁端面の内傾・口縁外面の凹線など比較的類似した形態の口縁である。色調は口縁外面のみ淡茶褐色で、他は明橙色を呈する。44・45は擂鉢の底部片で、44は交錯する櫛描条線が体部内面・内底面に施されている。45は体部内面に12条程度を一単位とする櫛描条線、内底面には3条程度を一単位とする櫛描条線が放射状に施される。

土師質土器(第6図46~52)は、小皿(46・47)、羽釜(48)、土鍋(50、51)、その他(49・52)がある。46は口径6.0cmの厚手のつくりのもので、短くのびた口縁端部を外方につまみだしており、内外面はロクロナデを施す。47は口径7.3cmの薄手のつくりのもので、丸くおさめた口縁端部には煤が付着している。48は2箇所に錐状の突起が付くもので、上位突起および下位突起以下に煤が付着している。50・51は内面に横位の細かいハケ目、外面にナデを施す。52は底部片で、内面は横位ハケ目、外面上半は格子目叩き、下半は縦位ハケ目、下端~外底面にかけて横位のハケ目を施している。

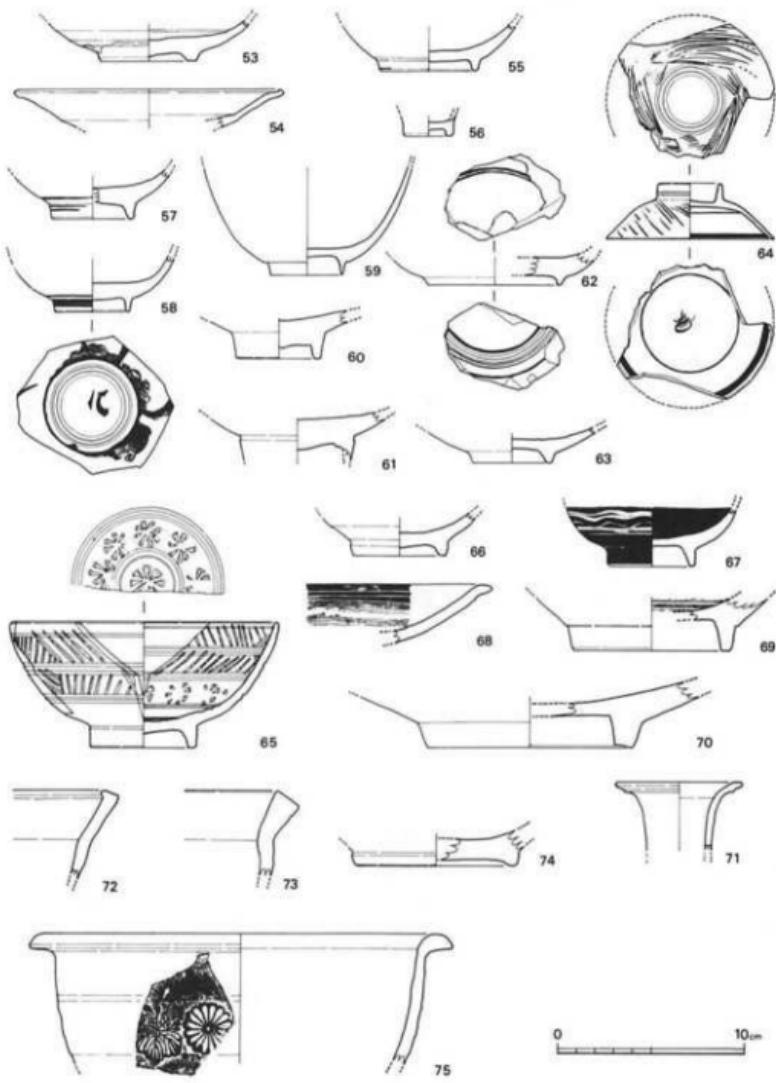
(2) 第2貝層

第2貝層は調査区南端にあり、大半は調査区域外に抜がるため、全容は不明である。また住宅があったため、削平をうけており、貝層の厚さは20~40cm遺存している。貝殻はアサリがほとんどを占めるとともに破碎を受けている。

出土遺物 貝層中からは、陶器(第7図53・54)・磁器(55・56)が出土している。53は唐津焼の皿で、見込み・高台疊付に砂目跡がみられる。見込み周縁に段差が付き、中央が浅く凹む。素地の色調は淡黄褐色である。54も皿で、屈曲して水平気味にのびる口縁の端部がやや上方に肥厚する溝縁皿である。素地の色調は淡赤褐色である。口径は14.6cmである。55・56は瓶で、55は高台外面に赤絵が部分的に認められる伊万里焼系のもので、内面は内底面中央を除き無釉、外面は高台疊付を除き施釉している。素地の色調は淡黄白色である。56は伊万里焼系で、無釉の高台疊付に砂目跡がみられる。

(3) 第3貝層

第3貝層は調査区東端に位置し、第1貝層(1-A)の東北4m、第1貝層(1-C)の東2mにある。現存規模は東西約15.0m×南北8.5mで、南に僅かにひろがる可能性がある。2~26cmの薄い表土(褐色砂質土)層直下に最大75cmの厚い貝層の堆積がみられ



第7図 第2・3貝層出土遺物実測図 (1:3)

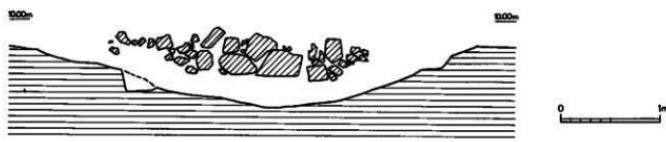
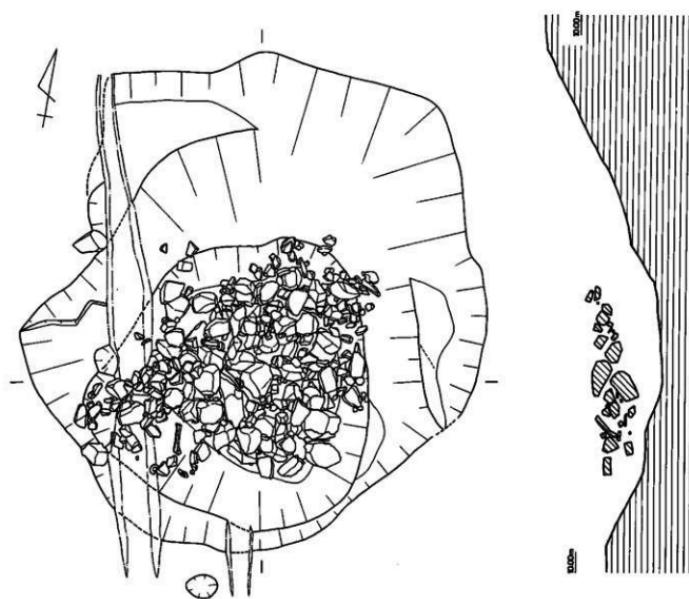
る。貝層は純貝層で、アサリがほとんどである。3a層の混貝土層は北端付近にみられ、南半部では純貝層のみである。南半部では純貝層中に最大36cmの厚さの拳大の貝殻を多く含む疊層をレンズ状にかんでいる。なお、貝層の下層では、貝殻は破碎をうけていないが、上層は破碎をうけており厚く堆積している。第1貝層同様、貝層直下には黒褐色砂質土層上面が存在する。この黒褐色砂質土層上面は南に低く北に高い。北半部ではこの黒褐色砂質土層直下に、暗褐色砂質土層（5層）、暗黄褐色砂質土層（7層）があり地山に至る。貝層の貝殻の種類はやはりアサリがほとんどを占める。

出土遺物 貝層中からは、磁器・陶器・土師質土器・瓦質土器が出土している。

磁器（第7図57～64）は、伊万里焼（58・59）、伊万里焼系（57・62～64）に分かれる。60は中国（明）製、61は朝鮮（李朝）製の可能性もある。器種は、碗あるいは碗の可能性のあるもの（57～61）、皿（62・63）、碗蓋（64）がある。57は見込み蛇ノ目釉ハギ、疊付露胎で、胴部下端から高台外面にかけて3条の圈線を描く。58は高台疊付露胎で、胴部下端から高台外面にかけて3条の圈線と雲様の文様の染付を施す。高台内中央に文字状の染付がみられる。59は薄手の白磁碗で、胴部下端に削り込みが認められる。高台疊付無釉。60は青磁（暗灰色）で、高台内～疊付にかけて無釉である。61は白磁碗で、見込み周縁に浅い削り込みと砂目跡がみられる。62は高台疊付露胎で、見込み周縁や高台外面などに計6条の圈線を描く。63は見込み蛇ノ目釉ハギ、高台無釉である。素地の色調はやや赤味がかった黄白色である。64は高台疊付露胎で、体部外面に文様、内面に2条の圈線。内底面中央には火炎宝珠の文様を描いている。口径8.5cm、器高3cmである。

陶器（第7図65～71）は、唐津焼（67～70）、唐津焼系（65・66）、備前焼系（71）がある。65は象嵌手法による三島手の碗で、桧垣文と花文を施す。口径14.0cm、器高6.7cmである。素地の色調は淡褐色で、施釉部分は濃茶褐色である。67は「刷毛目」手法による碗で、高台疊付露胎である。素地の色調は淡赤褐色で、施釉部分は黒褐色である。68・70は二彩唐津の皿で、68は色調が淡褐色の素地に白化粧土で横縞を描き若干緑がかった釉を施す。外面口縁以下無釉である。70は色調が茶褐色の素地に黄白褐色の化粧土を施し、濃緑色～淡緑色釉を流す。外面は無釉である。見込み・高台疊付に砂目跡が残る。69は鉢で、内面に渦巻状の文様を描き、透明釉を施す。外面無釉で、体部から高台外面上半にかけて鉄漿を塗り、色調は暗褐色である。素地の色調は淡赤褐色である。71は備前焼系の徳利かと考えられるもので、素地淡茶褐色で透明釉を施す。

72・73は土師質の土鍋であり、72は口縁端部をL字状に内側に肥厚させている。73は外傾した口縁端部を内側に肥厚させている。



第8圖 SK 1実測図 (1 : 40)

75は鉢と考えられる瓦質土器で、口径20.3cmである。胎土の色調は黄白色～白色で、内・外面は灰黒色～暗灰色である。胴部内面やや粗い横ナデ、水平に近くつよく屈曲する口縁部上面は丁寧なヘラミガキ状の調整で、下面是やや粗い横ナデを施す。胴部外面は丁寧な横ナデを施しており、中央には2条の幅広の突帯にはさまれた中に菊花と桐の葉を陽刻した文様を配している。

2. 貝層下の造構

(1) SK 1 (第8図、図版3)

第1貝層西半の貝層直下にある集石土塙である。貝層直下の黒褐色砂質土層上面から掘り込まれている。第1貝層形成前の造構で南北5.0m×東西4.7m、深さ(最大)0.56～1.4m、平面形が不整円の土塙である。土塙西南寄りに南北2.8m×東西2.9mの平面形が不整円形の中端の稜線がつき、この中端の上面位の範囲で、2～3重に重なった状態で10～30cm大の角礫が集中的に出土している。この集石は、土塙の底面から20～30cm程度浮いた状態で出土していることから、この土塙がある程度埋積した段階でこれらの礫が投げ込まれたものと考えられる。貝層はこの集石の上面を間層をおかずにおおっており、角礫の土塙への投棄直後に貝層の形成が始まったものと考えられる。角礫間あるいは集石上面からは、中国(明)製のものを含む磁器や陶器、土師質土器、石臼のほかに獸骨が出土している。陶磁器は、16世紀末～17世紀前半のものが多く、集石の形成はこの時期を中心とした時期に、また、土塙の掘り込みはそれより若干遅ると考えられる。

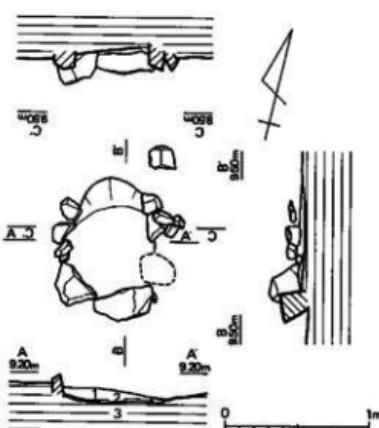
出土遺物 第10図76～80は磁器である。76は屈曲して水平にのびる口縁をもつ白磁の輪花皿で、見込み蛇ノ目釉ハギ、高台無釉である。口径9.6cm、器高2.3cm。77は白磁碗で、口径10.7cmである。78～80は中国製(明代末)で、78は底面中央が部厚く見込み周縁が回む青磁碗で、高台無釉である。79は、白磁と考えられ、口縁内外面に各1条の圓線がみられる。口縁端部はうすく、色調は黄褐色をおびている。80は薄手の白磁碗で、口縁内面に四方棒文、口縁外面に1条の圓線を、胴部外部には細い陰刻文(花文)が施されている。

81～85は陶器で、唐津焼(81・83～85)と備前焼系(82)のものがある。81は口径33.9cmの屈曲して水平にのびる螺旋の口縁をもつ二彩唐津の大鉢である。胎土の色調は淡褐色ないし暗褐色である。82は備前焼系の壺で、肩部には1条の凹線をはさんで横波状文を描く。83は絵唐津(鉄絵)の碗で、高台無釉で見込みにはロクロナデ痕跡が明瞭に認められる。胎土の色調は暗黄褐色である。84・85は直で、84は見込みに胎土目跡が認められる。低い削り出し高台で、内面および体部外面下端の接付近まで施釉している。胎土の色調は淡黄褐色である。85は、屈曲して水平にのびた口縁部の端部が上方に肥厚する溝縁皿

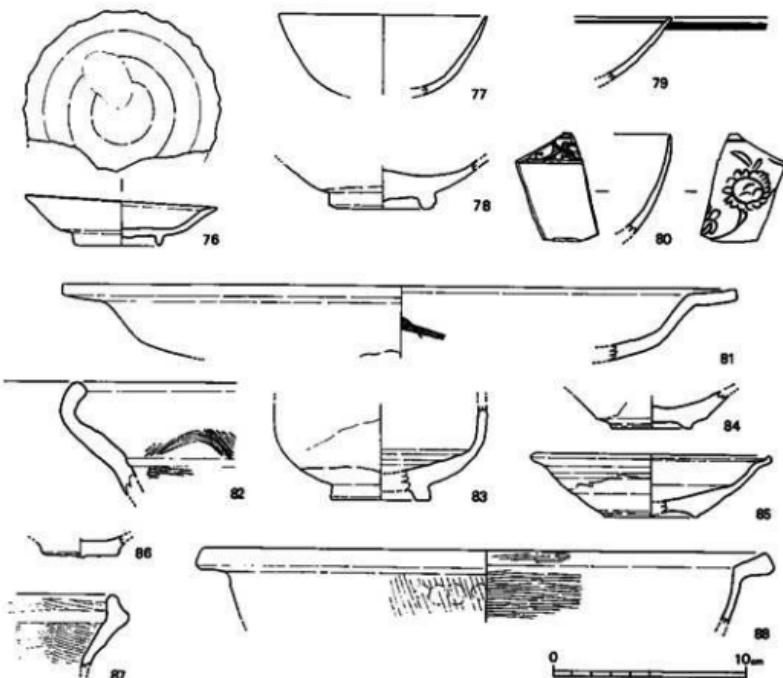
で、高台部分が明瞭でない削り出し高台である。見込み・高台疊付に砂目跡が残る。見込み中央に無釉部分があるが、ほぼ内面～外面体部上半施釉、体部外面下半～高台無釉である。外面の調整はロクロナデ。胎土の色調は淡褐色である。口径12.1cm、器高は3.3cmである。86・87は土師質土器で、86は小皿底部で回転糸切り、87は土鍋の口縁部で、内面は横位ハケ目、外面はナデを施す。

(2) SK 2 (第9図、図版3)

第1貝層の中央やや東寄りにあり、貝層でおおわれた炉跡である。南北約95cm、東西約



第9図 SK 2 実測図 (1 : 40)

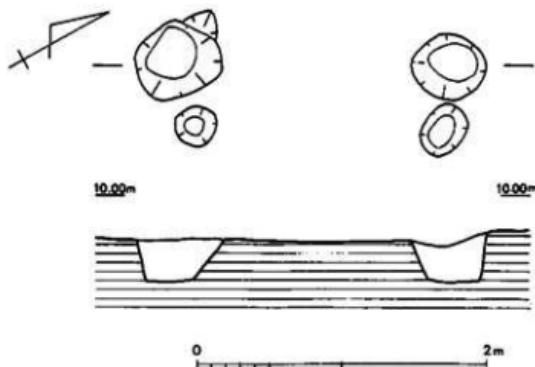


第10図 SK 1・2出土遺物実測図 (1 : 3)

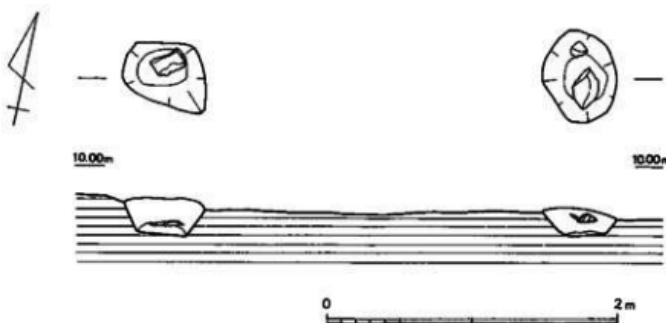
60cm、深さ17cmの梢円形の浅い土塙で、北辺を除いた土塙の周囲に10~40cm大の角礫を配している。土塙底面は全面的に焼けており、塙内埋土には、焼けた貝殻片、炭化物少量を含む。第9図88は、SK 2埋土から出土した土師質土器で、土鍋と考えられる。口縁は水平に近く屈曲する短かいもので、体部内外面ともハケ目、口縁部内面はハケ目のち横ナデ、端面~外面は横ナデを施す。口径は30.0cmである。

(3) SX 1 (第11図)

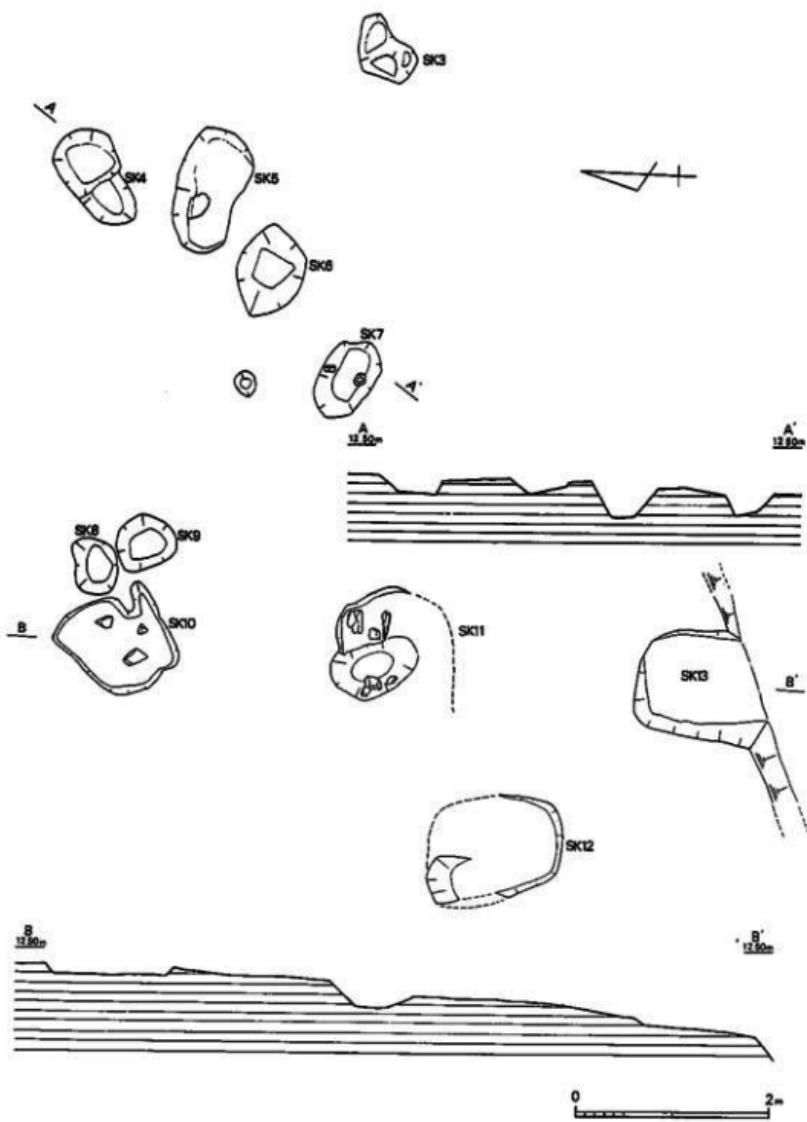
第3貝層西半の貝層直下にある大小のピット4からなるピット群である。大型のピットは、径52cm×45cm、深さ29cm、および径60×54cm、深さ24cmで、心間距離は1.9mであ



第11図 SX 1 実測図 (1 : 40)



第12図 SX 2 実測図 (1 : 40)



第13図 SK3～SK13実測図 (1:60)

る。小型のピットは、この大型のピットに南接しており、径28cm×26cm、深さ24cm、径38cm×28cm、深さ33cmで、心間距離は1.7mである。これらのピットに関しては、建物の柱穴と考えるには柱穴の心間距離は充分だが、ピットそのものの深さが浅いなど積極的な論提は示せず、現状では性格不明のピット群とせざるをえない。

3. その他の造構

(1) SX 2 (第12図)

第1貝層の1-Aと1-Bの中間に位置する2個のピットからなるピット群である。ピットの規模は、径66cm×44cm、深さ18cm、径64cm×51cm、深さ10cmで、心間距離は2.9mである。いずれのピットにも1~2個の20cm大の板石が入っており、柱の根石の可能性がある。本ピット群の性格については、根石と考えられるものがあることなどから、建物の柱穴である可能性がある。

(2) SK 3~SK13 (第13図、図版3)

第1貝層(1-B)の北方6m、一段上の平坦面(畠地)で検出した土塙群で、計11基の土塙とピットからなる。いずれもごく浅く平面形も不整形である。規模は径28×22cm~144×103cm、深さ5~18cmで、平面形は不整方形や不整円形を呈している。塙内からは、1~6個の10~50cm大の角礫が出土している。これらの土塙に伴う遺物はごく少ないが、少量の陶磁器・鉄釘などが出土している。

4. 調査区出土の遺物

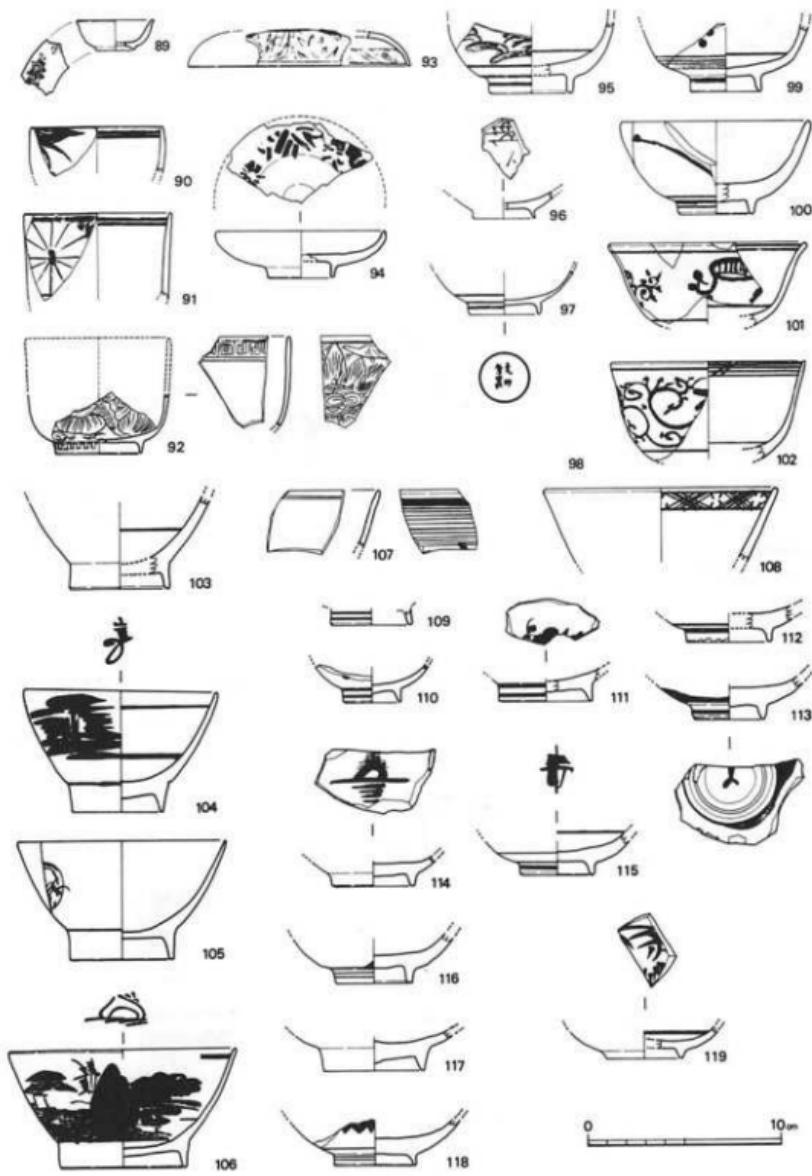
(1) 土器

磁器・陶器・土師質土器がある。

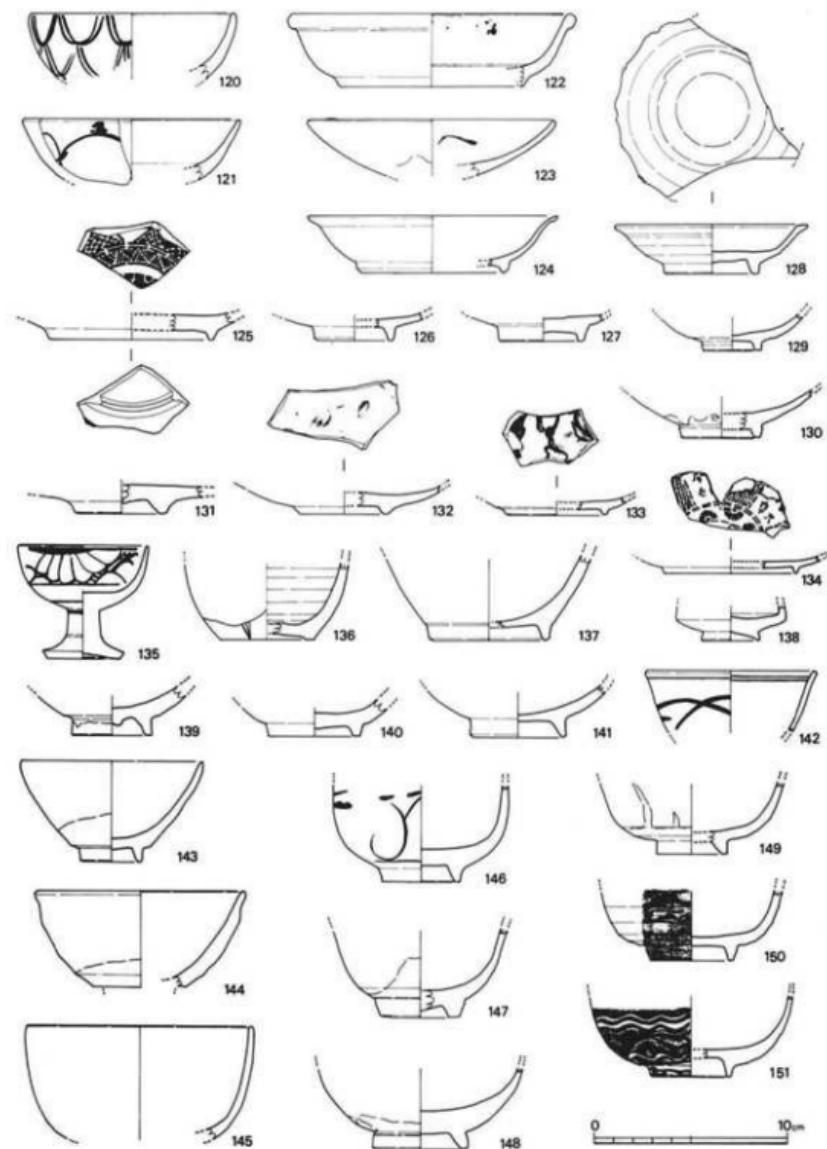
磁器(第14~15図、89~126・128・130~138・142)は、碗・皿を中心に瓶・仏飯器・香炉・碗蓋・猪口などがある。伊万里焼(97・100・108・113・117~119・123・132・135・136・138)、伊万里焼系(90・92・93・95・99・100~107・112・115・116・120・121・126・137)が主体で、瀬戸・美濃焼系(101)、その他(89・91・94・96・98・102・109・114・118・122・124・125・128・130・131・134)、中国(明)製のものが2点ある(111・133)。92は直立する口縁をもつ薄手のつくりの碗で、口縁内面に雷文、胴部外面に花唐草文、高台外面に櫛歯文を淡青色の呉須で描く。高台疊付露胎。93は口径11.3cmの碗蓋で、口縁内面に四方桿文、胴部外面に竹・筆などを描く。97の高台内には「大明年製」と記されている。103~106は、高く直立する高台に、直線的にのびる胴部をもつ、いわゆる「廣東型」の碗である。108は口縁内面に四方桿文の染付を行い、胴部外面青磁(灰緑色)である。112は見込み蛇ノ目釉ハギ、113は高台内に文字様の染付(灰青色)がみられる。114は見込みに水面に浮

かぶ島・小岩をあらわす文様が描かれている。115は見込み中央に「寿」字文を描く。117は高台内無釉で、施釉部分は淡青色である。118は見込み蛇ノ目釉ハギで、外面にコンニヤク判による施文がみられる。119は2条の圓線に囲まれた見込みに草花文状の文様を描く。120及び121は器壁が厚く、器高の低い碗である。120は口径17.0cmで、外面に網目文を描く。121は口径11.1cmで、外面に梅園を配す。122は口径14.2cm、器高3.8cmの玉縁をもつ皿で、内面に草花文が描かれる。123は口径12.5cmで、見込み蛇ノ目釉ハギである。内面に染付がみられる。124・128は、口縁が屈曲して水平にのびる白磁皿で、128は輪花皿である。125・134は見込みに型紙摺による施文がみられる皿で、近代のものであろう。126は内面施釉、外面は高台疊付周辺を除いて鉄漿を塗り、色調は暗茶褐色である。130・131は見込み蛇ノ目釉ハギ、高台無釉である。132は高台疊付露胎で、見込みに草花文と思われる染付を施す。135は口径6.6cm、器高5.9cmの仏飯器で、杯部外面に菊花散らし文の染付を行う。脚端面～外底面は無釉で、脚柱部下端に1条の浅い削り込みがみられる。外底面はロクロケズリで、浅い段を介して中央にむけてゆるやかに凹む。136・137は瓶の底部片であり、136の外面胴部下端に草文の染付がみられる。138は香炉と考えられる。142は外面に草文を描く。111・133は中国（明）製の磁器で、111は見込みに花卉文を描き、細い圓線でこれを囲む。133は皿で、高台内無釉、見込みに染付を行う。

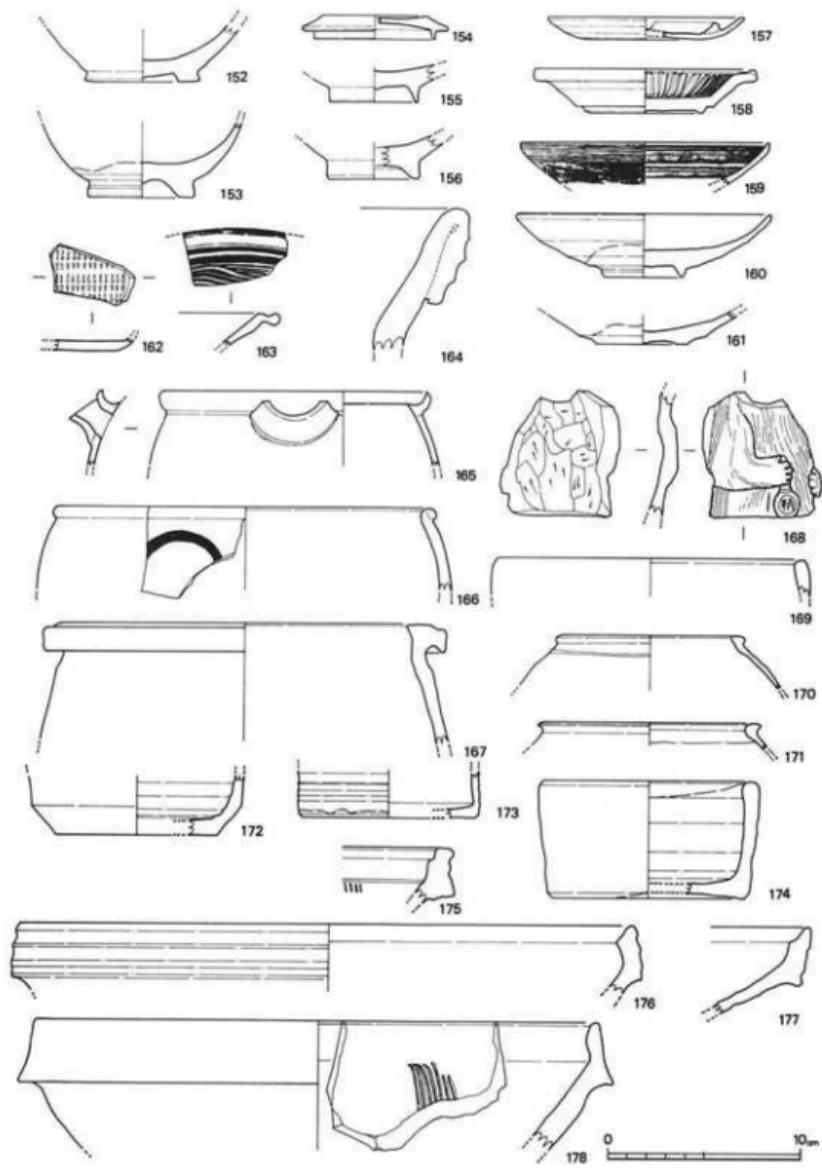
陶器（第15～17図、127・129・139～141・143～184）は、器種としては碗・皿を中心に、蓋・灯明皿・おろし皿・瓶・大甕・片口鉢・土瓶・擂鉢・へそ徳利などがある。唐津焼（127・139・147・148・152・153・161）、唐津焼系（149～151・155・160・163・167）、備前焼系（164・175～184）を中心に、瀬戸・美濃焼系（144・158）、京焼風陶器（141・156）、伊万里焼系の半磁器（146）、その他（129・140・143・145・148・154・157・159・162・165・166・168・169・172～174）がある。127は見込み・高台疊付に砂目跡がみられる。139は高台無釉である。141・156は京焼風陶器の碗で、色調は淡黄褐色～黄白色で、貢入が顕著である。143は口径9.4cm、器高5.2cmの碗で、外面胴部下半～高台無釉、施釉部分は嵩灰釉を施しており、色調は灰白色である。144は瀬戸・美濃焼系の天目茶碗で、口径10.6cmである。黒釉を施し、施釉部分の色調は黒褐色～茶褐色である。145は丸味のつよい口径11.5cmの碗で、胎土は灰白色である。施釉部分の色調は灰緑色である。貢入が認められる。146は伊万里焼系の半磁器で、胴部外面に草花文を描く。胎土の色調は暗灰色である。施釉部分の色調は暗灰白色である。147は高台無釉で、他は灰釉を施して、色調は淡灰緑色である。148は高台無釉で、胎土の色調は暗淡黄色、施釉部分は灰色～灰褐色である。149は、胎土の色調は淡茶褐色、施釉部分は暗褐色で、高台無釉である。施釉部分にはこまかい貢



第14図 調査区出土遺物実測図(1) (1 : 3)

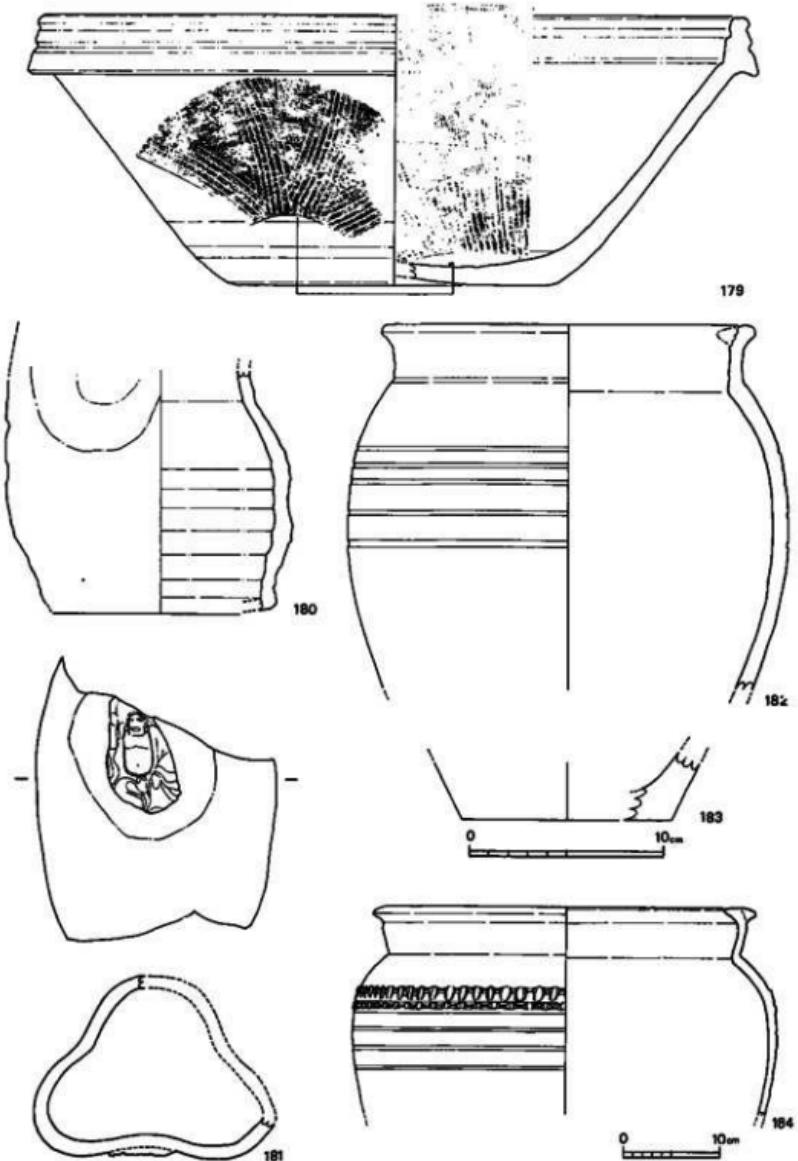


第15図 調査区出土遺物実測図(2) (1 : 3)



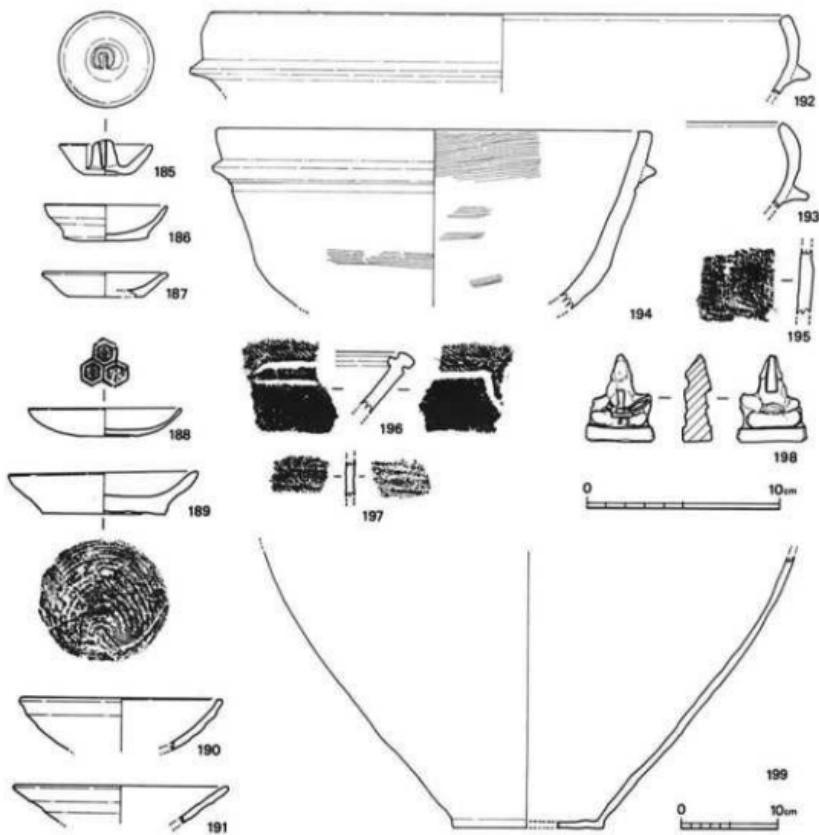
第16图 调查区出土遗物实测图(3) (1 : 3)

入がみられる。150・151は、外面に白化粧土で波状文を描く「刷毛目」手法の碗で、胎土の色調は暗褐色である。152は外面無釉、内面施釉で、胎土の色調は淡黄褐色である。153は灰釉を施した碗である。154は色調が淡黄褐色の素地に透明釉を施した蓋で、口径6.1cmである。内面無釉である。155は「刷毛目」手法により渦巻状の文様を施した碗の底部である。157は灯明皿で、内面に半月状の切り込みをもつ「受け」が付く。色調は暗赤褐色で、口径9.6cmである。158は瀬戸・美濃焼系の折縁の菊皿で、口径10.8cm、器高2.3cmである。高台疊付露胎で、見込み蛇ノ目釉ハギ、見込み・高台疊付に輪トチ跡がみられる。全面に灰釉を施し、色調は灰黄緑色である。160は口径12.8cm、器高3.3cmの皿で、見込みに蛇ノ目釉ハギを行い、この部分に重ね焼きのためのアルミナ砂を塗付している。高台無釉である。162はおろし皿で、内面施釉で、色調は茶褐色の外面無釉である。163は「刷毛目」手法による溝縁の皿あるいは鉢である。164は備前焼系の大甕の口縁部である。165は片口鉢で、色調が淡黄褐色の素地に透明釉を施す。166は口径191.1cmの大型品で、内傾する口縁端部は玉縁状をなす。口縁端面のみ無釉で、外面に色調濃褐色の染付を施す。167は口径16.8cmで、内上方に直線的に立ちあがる口縁部の端部を外方に大きく引き出すものである。168は狸をかたどったもので、内面指ナデを施す。右手にもった徳格には「柄」銘がみられる。色調は全面暗茶褐色である。170・171は薄手の器壁が口縁端部で肥厚するもので、土瓶の口縁部片ではないかと考えられる。口径は170が8.3cm、171が10.1cmである。170は外面施釉、内面無釉で、口縁端部には白化粧土を塗付、外面にも白化粧土による隆起線文状の文様を描く。174は窯道具のサヤとみられるもので、口径が9.8cm、器高6.0cmである。口縁端部～外面に嵩灰釉状の釉を施す。胎土の色調は明茶褐色である。175～179は擂鉢で、口縁部の形態により断面三角形で端面ほぼ平坦、内外面に各2条の幅広の凹線を施すもの（175・179）、口縁端面がつよく内傾し、外面に3条の凹線を施すもの（176・177）、内傾する口縁の端部を丸くおさめ外面に凹線を施さないもの（178）に分けられる。178は胎土の色調は淡黄褐色で口縁部外面のみ暗灰色で、他は茶褐色である。内面に7条を一単位とする擂り目が間隔をおいて施される。178は口径28.0cmである。178は口縁部の形態・擂り目の状況などから、他の175～177・179より先出的と考えられる。179は10条一単位の擂り目が左回りに密に施されている。内底面には放射状に8～9条を一単位とする擂り目が右回りに施されている。口径34.4cm、器高14cmである。180・181は胴部中央が3個所大きく凹む「へそ徳利」である。181には大黒天の浮文が貼付されている。いずれも胎土の色調は明茶褐色で、器表は濃茶褐色である。182・183は同一個体の甕と考えられる。口径18.1cmで調整は最終的には全面にロクロナデを行っているが、特に胴部外面にはロ

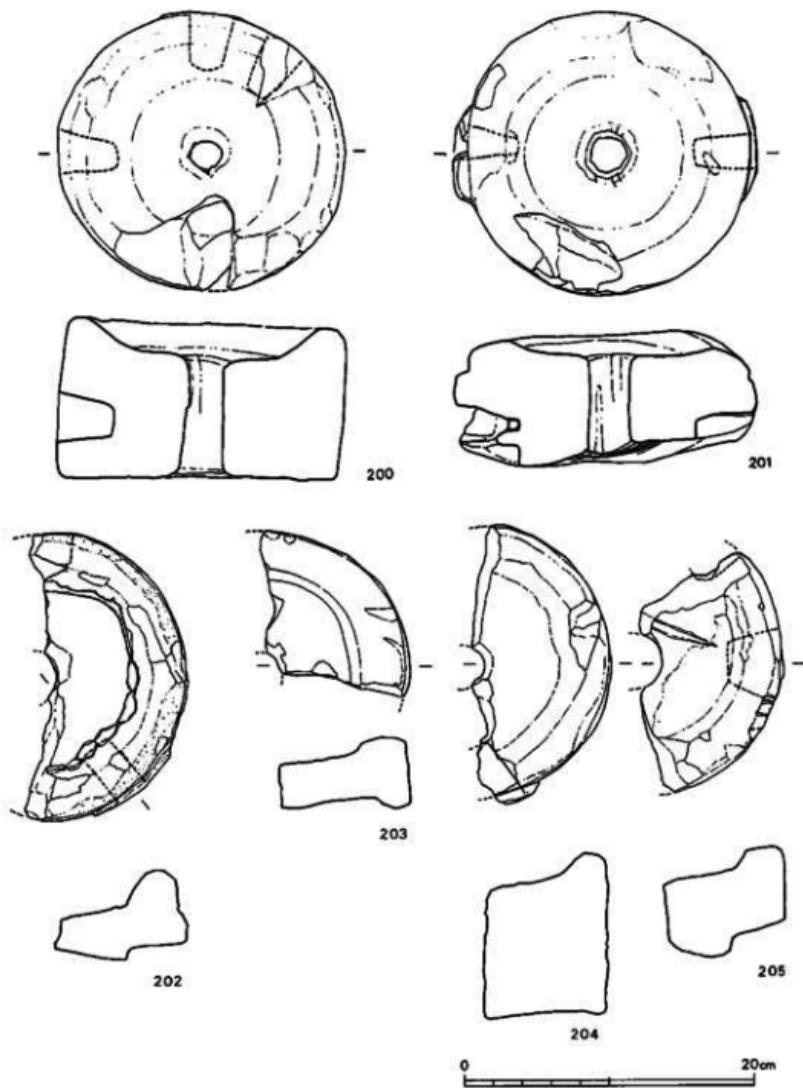


第17図 調査区出土遺物実測図(4) (1 : 3, 184は1 : 6)

クロナデに先行する格子目叩きが認められる。胴部外面には3条の幅広凹線がみられる。胎土の色調は淡橙褐色で、外面濃茶褐色である。外底面は未調整である。口縁は内外に大きく拡張させたものである。184は口径32.6cmの大甕で、口縁端部は大きく内外に肥厚させている。胴部外面に2条の削り出し突带上に指頭押圧を施す。突帶の下位に3~5条の幅広の凹線を施す。185~194および199は土師質土器である。185~191は小皿で、185は内底面に芯立てをもつ灯明皿で芯立て上面と口縁の一部に煤が付着している。口径4.4cm、器高1.6cm。186は口径6.2cm、器高1.9cm。外底面に板目痕かとみられる痕跡が認められ

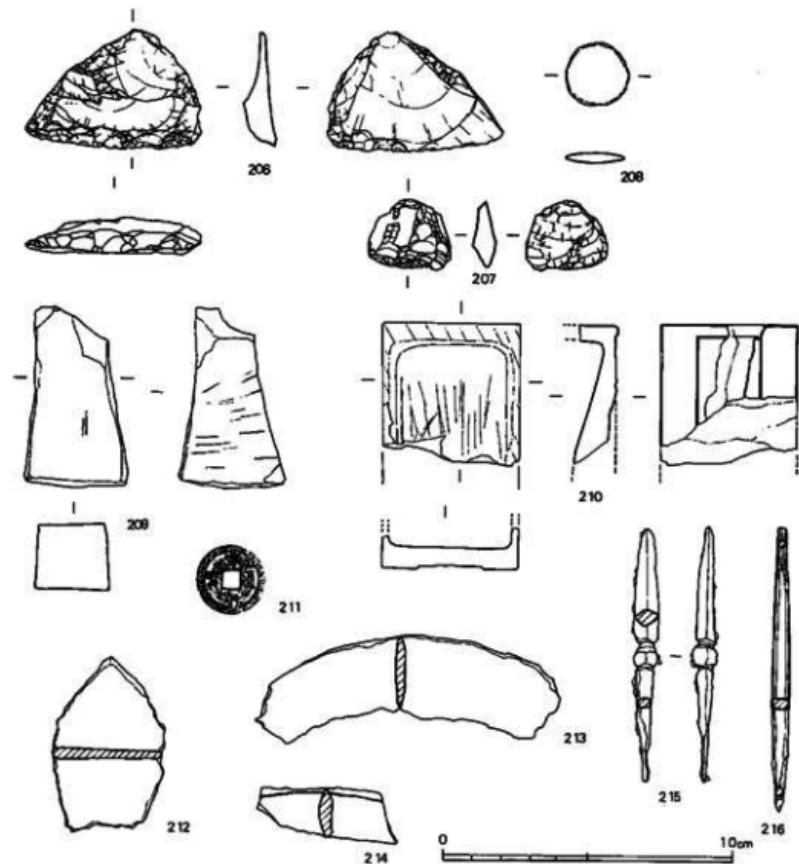


第18図 調査区出土遺物実測図(5) (1 : 3, 199は1 : 6) アミ目は煤を示す。



第19圖 調查區出土遺物實測圖(6) (1 : 4)

る。内外面には粗い横ナデを施す。187は口径6.2cm、器高1.3cmで、内外面横ナデを施す。188は口径7.8cm、器高は1.5cmで、内底面に押型による亀甲文がみられ、宮島焼と考えられる。189は口径9.4cm、器高2.3cmで、内外面横ナデを施す。底部糸切りである。190は口径9.8cmで、内外面横ナデである。191は口径10.5cmで、内外面横ナデである。192・193は羽釜で、内外面ナデ、外面に断面三角形の貼付突帯を施す。外面には煤が付着する。192は口径28.6cmである。194は口径21.0cmの羽釜と考えられるもので、外面の口縁部直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面ハケ目で、下半では指頭による押圧・ナデを加えている。199は大甕の底部片である。



第20図 調査区出土遺物実測図(?) (1 : 2)

195～197は縄文土器片で、195は内面横位条痕文、外面は調整不明である。197は内外面とも横位条痕文、196は口縁部内面に突帯、口縁部外面に幅広で深い沈線を施し、口縁端面に縄文、口縁部下内外面はナデ状の調整を施す。198は土人形(天神像)で、高さ30cm、最大幅2.4cmである。

(2) 石器・鉄器・その他

200～205は石臼で、いずれも上臼である。外径は20cm前後で、石材は花崗岩質のもの(200～202・204)、砂岩質のもの(203・205)とがある。外側面に軸受の柄孔が認められるもの(200～202・204・205)、軸受の突起が認められるもの(201・202・204)がある。206は横長剝片を素材としたスクレイバーで、素材剝片の端部に連続的な加工を施して刃部を形成している。石材は安山岩である。207は水晶を用いた楔形石器である。208は基石と考えられる。209は砥石で擦痕が認められる。210は硯で、長軸に並行した擦痕が認められる。裏面には浅く段差が付く。石材は褐色～暗褐色の堆積岩である。211は寛永通宝(銅錢)である。212～214は用途不明の鉄器で、213については鎌の可能性がある。215は、上半部の断面が菱形を呈する用途不明品で、長さ8.7cmである。216は棒状の骨角製品で、長さ9.8cmである。先端を削って尖らせ、削り込まれた基部には斜位の擦痕が顕著に認められる。

V. まとめ

郷貝塚の調査については本文に述べたとおりである。この貝塚はアサリがほとんどで、ごくわずかにハマグリ、マガキ、巻貝などがある。貝塚の形成時期については、第1貝層直下の集石土塙（SK 1）の集石間・集石上面で出土した唐津焼、中国（明）製磁器などからみて、近世初頭の16世紀末から17世紀前半頃には、貝層の形成がはじまったものと考えられる。そして、各貝層中から江戸時代の各時期の陶磁器類が出土していることから、貝塚は江戸時代を通して形成されたと推定され、下限は近世末（19世紀前半）頃と考えられる。

貝塚直下の土は旧表土とみられ、花崗岩のバイラン土を含む黒褐色砂質土である。この層の下には花崗岩のバイラン土である黄褐色砂質土がある。このことは当時、貝塚の付近は水田に適さなかったことを示しており、荒地の状態であったことがうかがわれる。このため、この場所が貝殻の投棄場所になったのであろう。

貝層の状態は、比較的遺存のよい第3貝層の純貝層（3b層）では貝殻が破碎を受けていない下層と、故意に破碎を受けている上層に区別される。なお、貝塚全体では後者の状態で広がっている。貝殻におけるこの違いは、貝殻の利用法に違いがあったのではないかと推定される。貝殻の利用法として、大野町及びその南隣の大竹市においては、30~40年前まで山裾の畑を転地返しして耕土改善する場合、破碎した貝殻を混入することを行っている。本遺跡における貝殻の大量破碎は、このような利用法が江戸時代にあったことを暗示させる。なお、貝の種類はアサリがほとんどで、貝殻の量的な状況を考えると1軒或は数軒の家族による日常的な食料とするには多すぎることからすると、産物として貝のむき身を近郊や広島、岩国などへ出荷していたのではないかと推定される。

本遺跡の付近には上更地貝塚、大野中学校裏貝塚など中世から近世にかけての貝塚と考えられるものがいくつか知られている。これらはいずれもアサリを主としており、江戸時代から広島の特産となっているカキは量的に少ない。一方、広島湾東岸の呉市においても中世から近世にかけての貝塚と考えられるものが数多く分布している。しかし、これらの貝塚は発掘調査が行われていないため詳細は明らかではない。この度の郷貝塚の発掘調査の成果としては、貝塚の一部は搅乱を受けているなど、十分な成果とは言い難いとしても、広島湾における中世から近世にかけての貝塚の研究、あるいは産物の出荷など日常生活の一端を知るうえで良好な資料である。

つぎに出土遺物の大半を占める陶磁器について若干述べたい。まず、陶器については、

唐津焼・唐津焼系陶器及び備前焼系陶器が主体を占め、他に若干量の瀬戸・美濃焼系陶器、京焼風陶器などがある。備前焼系陶器は、擂鉢をはじめ大甕・壺・徳利など大形の日常雑器が多い。これに対し、唐津焼・唐津焼系陶器などは、碗・皿・鉢など小形・中形のものが多い。唐津焼・唐津焼系陶器は、16世紀～17世紀前半の唐津焼焼造開始直後のものが多く（27・33・53・65・83・84・85・127・139・147・148・149・152・153・161など）、見込み・高台疊付に胎土目跡・砂目跡のみられるものが多い。三島手の碗（65）、絵唐津の碗（83）、溝縁皿（85）などが認められる。高台疊付露胎のものと、高台全面無釉のものとがみられる。次いで、17～18世紀代のものがみられ、19世紀代に属するものはみられない。17～18世紀代の製品には、「刷毛目」手法のもの（29・67・150・151・160・163）、二彩唐津の鉢あるいは皿（68・70・81）がある。磁器は、伊万里焼・伊万里焼系磁器を主体とする。器種としては、碗・皿を主体に瓶・碗蓋・仏飯器・香炉・猪口などがある。伊万里焼・伊万里焼系磁器は、主として17世紀後半以降、特に18世紀～幕末に属するものが大半で、17世紀前半に属すると考えられるものは数少ない（16・117・132・136）。見込みに重ね焼きのための蛇ノ目釉ハギがみられるもの、見込み・高台疊付に砂目跡がみられるものがある程度認められる。胴部外面・口縁内面を中心に染付がみられ、その文様は多種多様である、また、見込みや高台内の中央に銘あるいは文字状の文様が認められるものがあり（5・7・58・97・104・113・115）、その銘は、「大明年製」（97）、「寿」（104・115）などと読める。なお、輸入磁器として、中国（明代末）のものがある程度みられる（18・19・20・21・22・60・78・79・80・111・133）。器種としては、碗・皿で、見込みを中心に花卉文などの染付を行うものがほとんどだが、80は外面に陰刻による花卉文を描く。

参考文献

1. 大橋康二「肥前陶磁の変遷—発掘資料を中心として—」「国内出土の肥前陶磁」昭和59（1984）年。
2. 大橋康二「肥前陶磁の流れ」「季刊考古学」第13号 昭和60（1985）年。
3. 堀市教育委員会「堺市文化財調査報告第20集 堀環濠都市遺跡発掘調査報告」昭和59（1984）年。
4. 矢部良明「中世陶器のもつ歴史的役割」「月刊文化財」265号 昭和60（1985）年。
5. 井上喜久男「16世紀の瀬戸・美濃窯」「中近世土器の基礎研究」昭和60（1985）年。
6. 伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」「中近世土器の基礎研究」昭和60（1985）年。



a. 貝層検出状況（西から）



b. 同 上（南から）



a. 第1貝層東西断面（南から）



b. 貝層堆積状況



SK 1 (検出状況)



SK 1 (集石除去後)



SK 2



SK 3 ~ SK 13



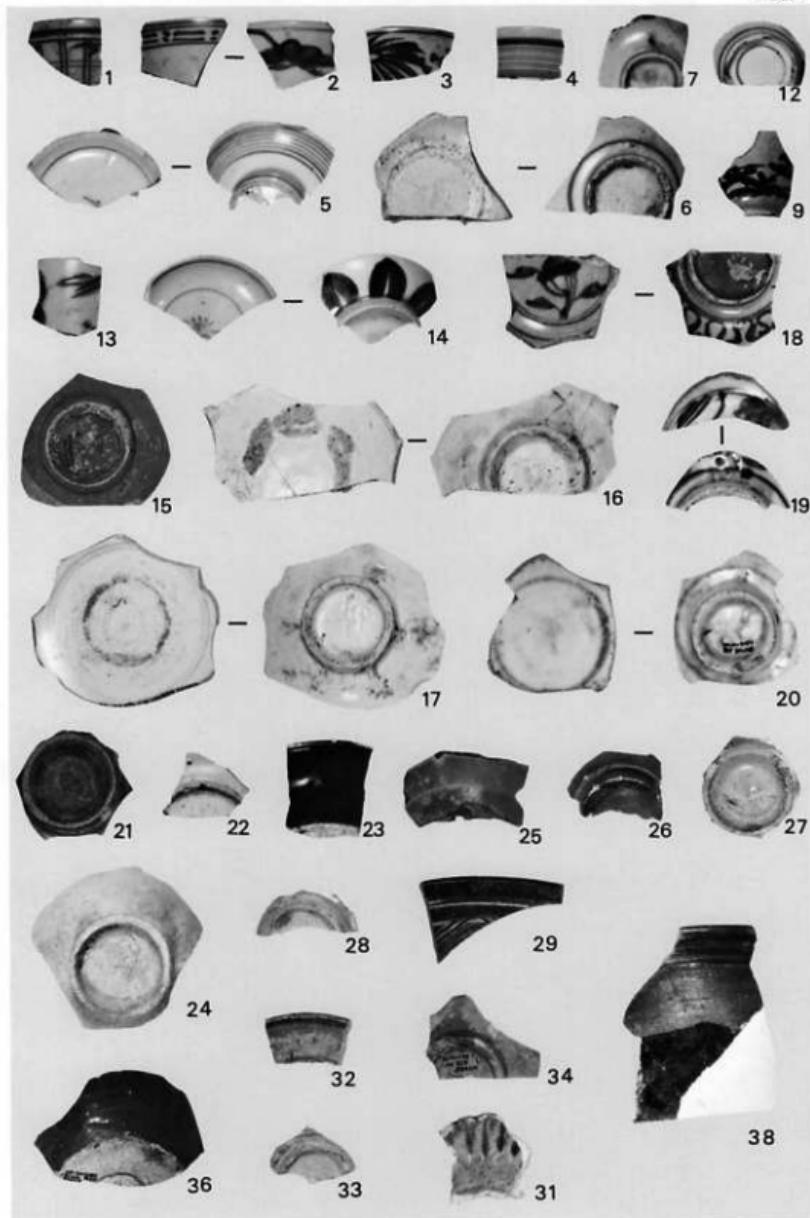
遺物出土状況



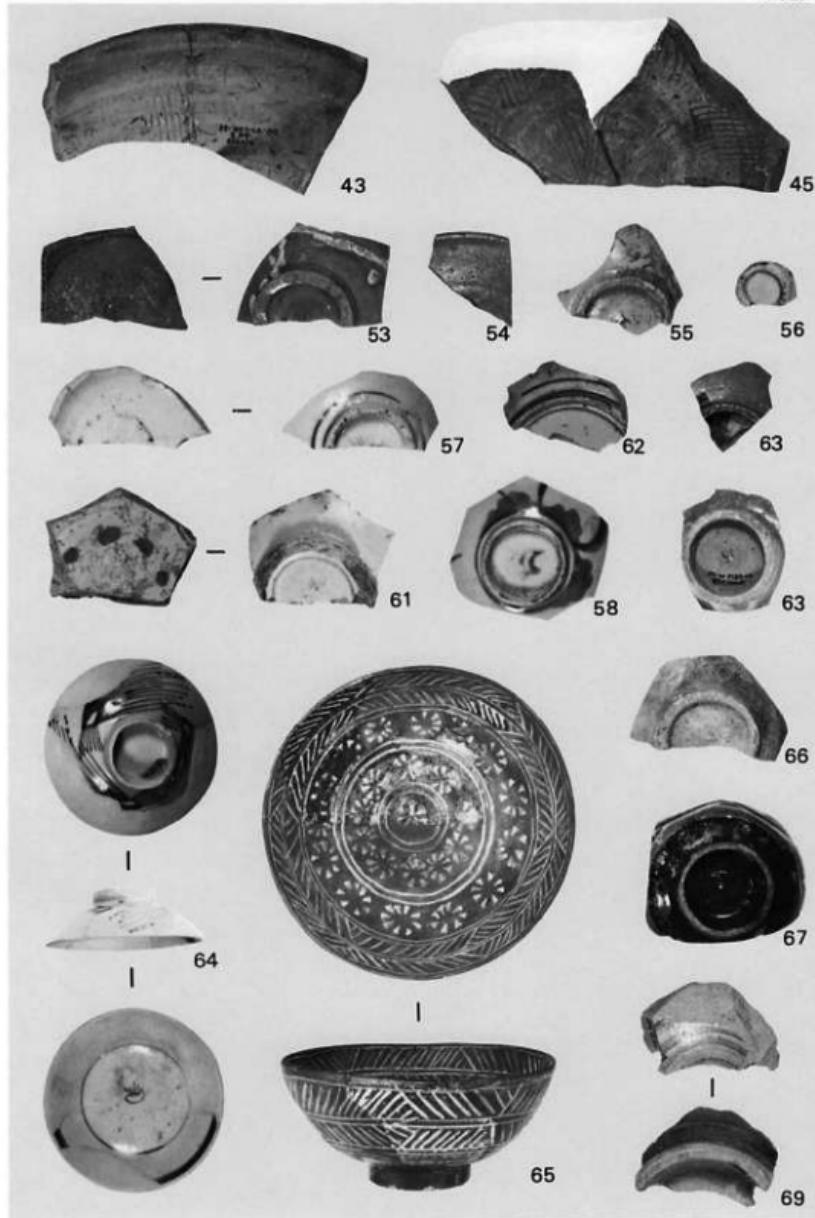
遺物出土状況

土塙及び遺物出土状況

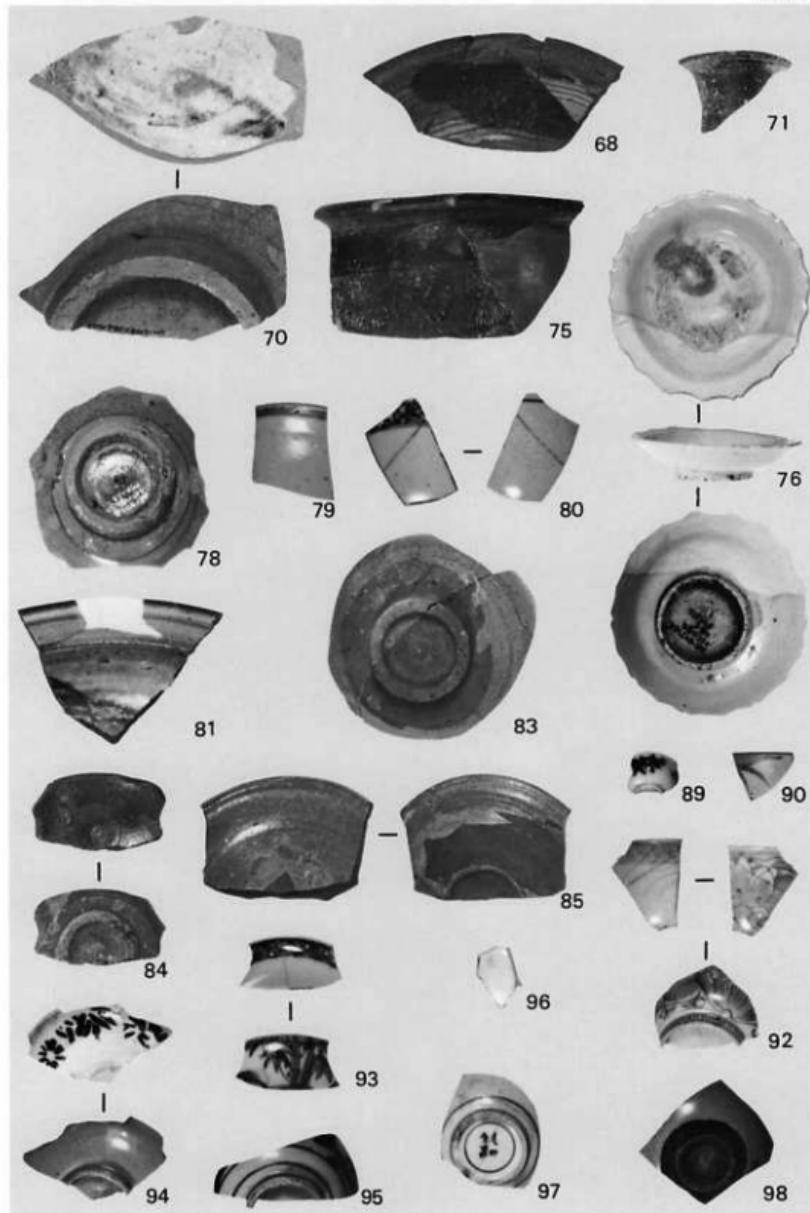
図版 4



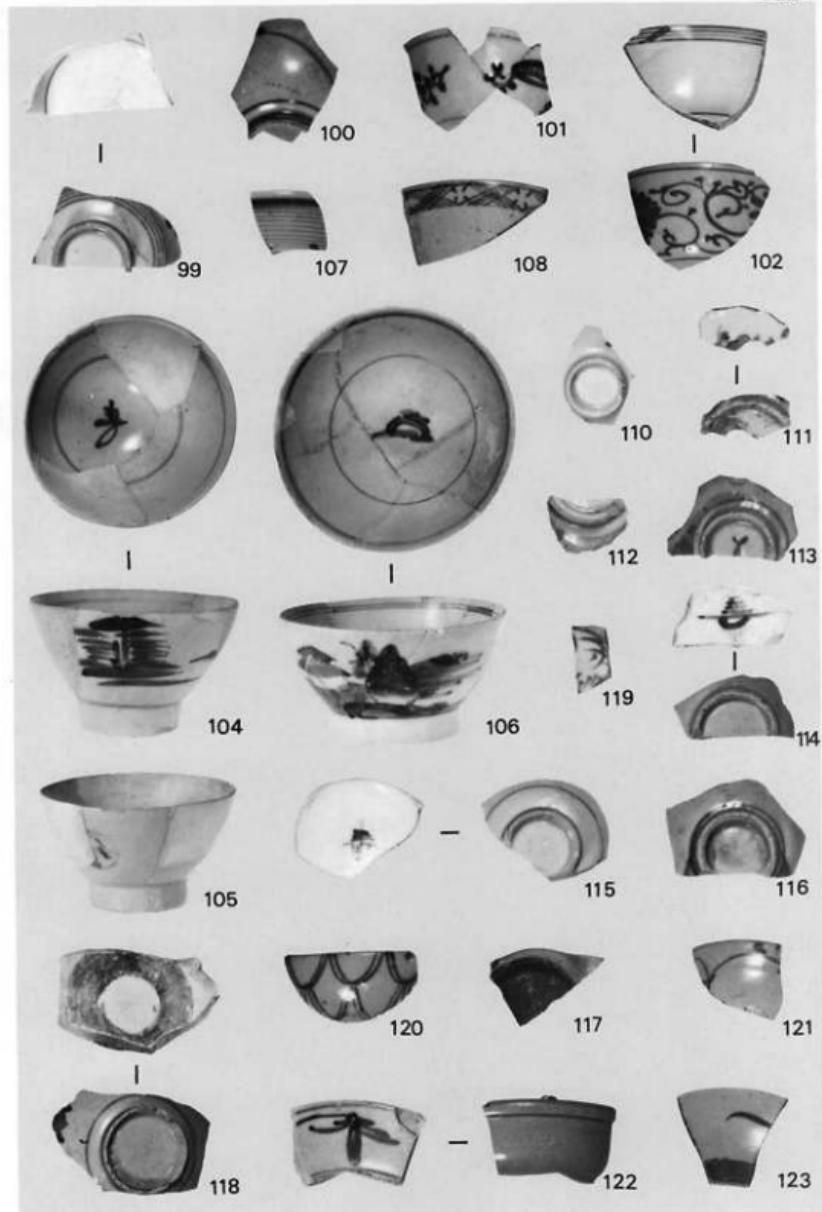
出土遺物 (1)



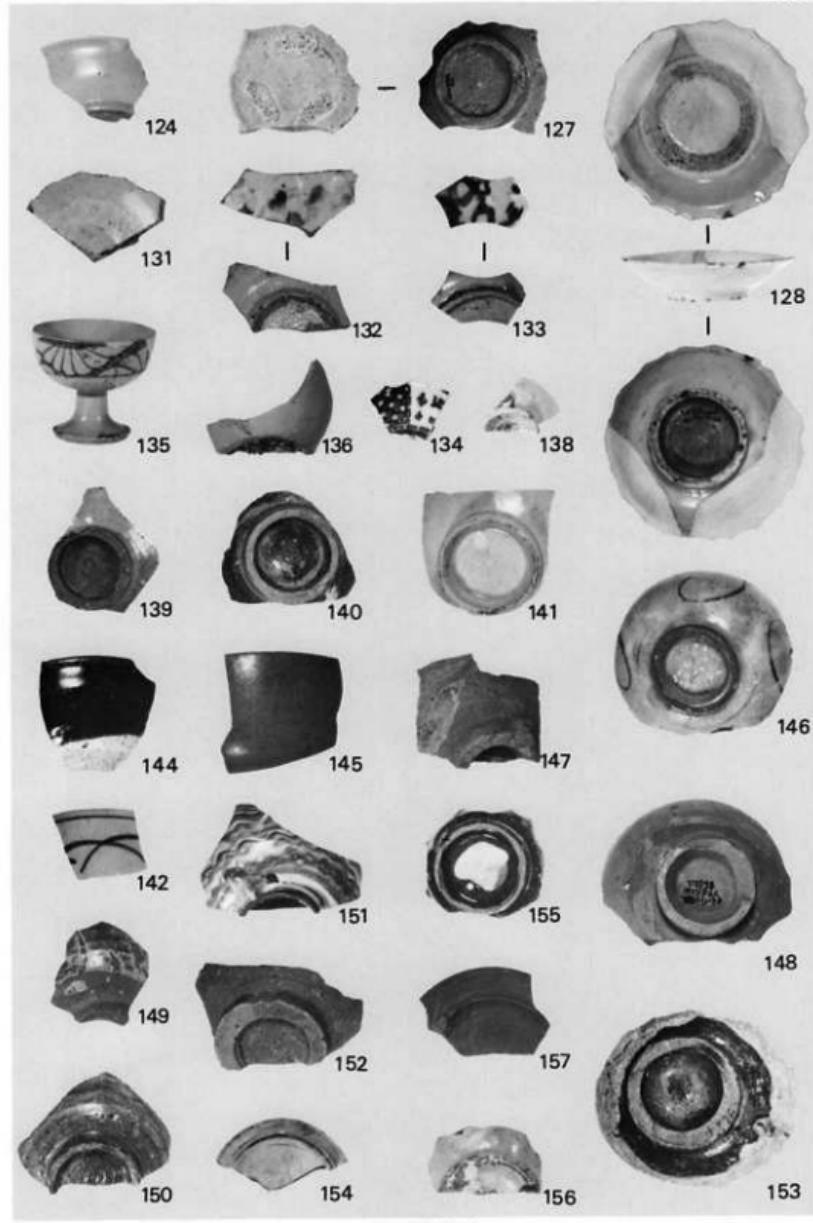
出土遺物 (2)



出土遺物（3）



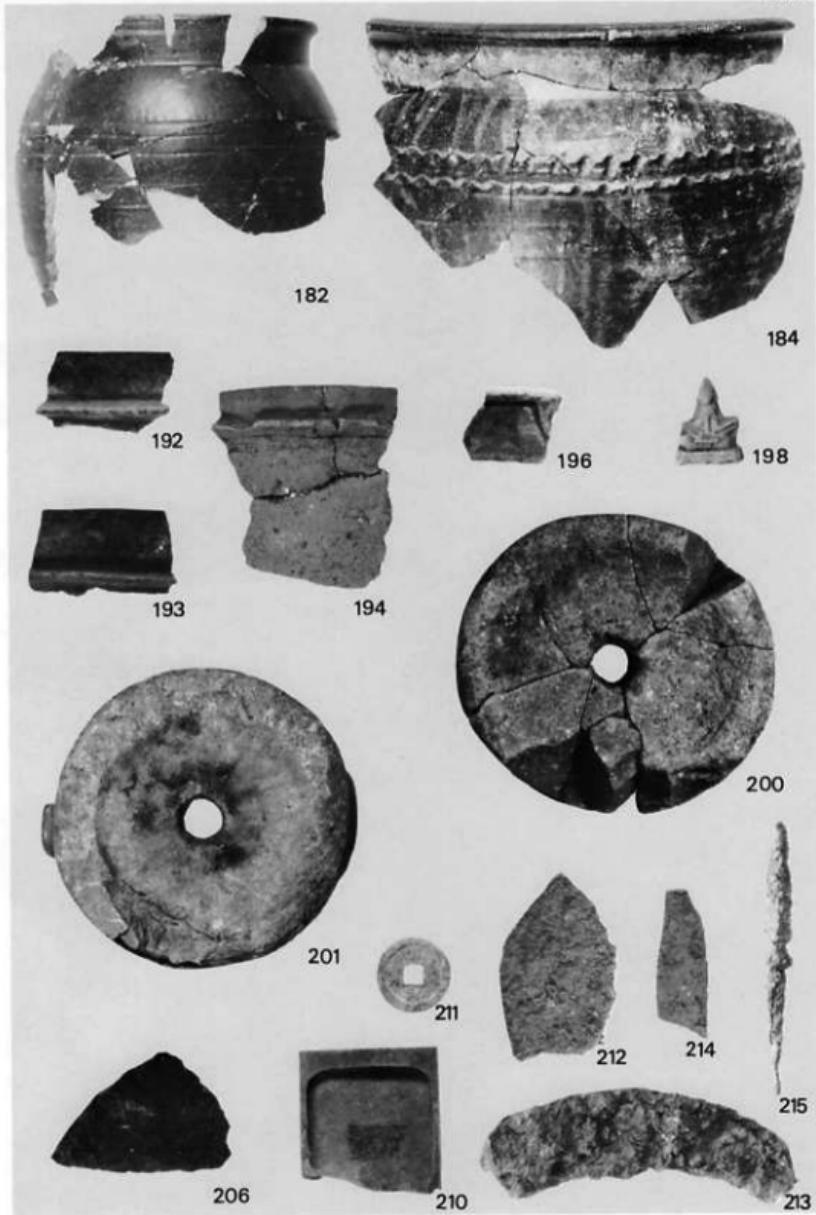
出土遗物 (4)



出土遗物（5）



出土遺物 (6)



出土遺物（7）

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第48集

貝塚発掘調査報告書

発行日

昭和61(1986)年3月

編集・発行

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区緑音新町4丁目8-49

TEL(082)295-5751

印刷所 山陽印刷株式会社

竹原市新庄町29

TEL(08462)9-1535